

文学テキストにおける人称とコミュニケーションの回路

野村 眞木夫*

(平成24年9月27日受付；平成24年10月26日受理)

要 旨

本稿では、日本語の現代小説の表現を、人称を基準にしてコミュニケーション回路の観点から検討する。これまで、アルゴンキン語族、アイヌ語などに4人称や5人称が想定されてきた。しかし、子細に観察すると、それらは総称人称や3人称、引用の1人称等であり、指示の体系として人称を規定する限り、4人称以上を認める必然性はない。文学テキストでは、地の文に1・2・3人称が等しく出現しうる。その組み合わせは、部分テキスト間で自由に転換される。それらの指示対象に語り手や作者が擬せられるばあいがあり、語り手または作者が登場人物と対話する関係、さらに読者と対話する状況が創出されもする。また、テキスト中の2人称者が現実の読者として認識される可能性がある。このような表現のありようを認めるとき、文学テキストのコミュニケーションの回路は、これまでに提案されてきたような入れ子型の対称的なモデルではありえず、テキストを介して非対称的な形状をなし、構造的な安定性を有しないものとみなされる。

KEY WORDS

人称	Person	人称の組み合わせのモード	Mode of Personal Combination
文学テキスト	Literary Text	共感	Empathy
コミュニケーション	Communication	描出表現	Represented Expression

1. 本稿の目的と方法

本稿では、日本語の文学テキストに現れる人称の範疇と人称表現が、テキストの個別性と類型性、つまりスタイルをとりだす要件であることを示す。このことをつうじてテキストの語りの諸問題に言及し、従来の対称的な物語のコミュニケーション回路を原理にすると、テキストのタイプに応じて破綻の認められることを指摘する。

日本語のテキストのうち、文学的な性質を有するジャンルをとりあげるのは、文学的なテキスト、特に物語・小説のタイプのテキストに人称表現が端的に出現し、その指示性に依存して、テキストの参加者（登場人物）とテキストの語り手や読み手との関係を問うことが可能だからである。また、テキストの地の文において人称の組み合わせられる類型が複数認められ、その組み合わせに応じて当該のテキストをめぐるコミュニケーションの回路が変化しうる。言い換えれば、テキストのコミュニケーションの枠組みを含めて、テキストに関わる主体の広範な関係性を問うのである。

本稿ではテキストに人称表現が出現したとき、どのような効果をもたらすのかを観察し記述することを当面の課題とし、個々の言語理論を越えた、日本語の表現の可能性をさぐるとする。そのため、これまでに提案されている特定の理論に高度に依存した範疇はもちいず、通念としての文法範疇や言語現象によりながら、日本語のテキストのありようを記述する。

人称の範疇や人称表現の多様性、人称制限の現象は、語彙の選択、モダリティと証拠性、スピーチレベルまたは待遇表現などの問題系としても展開されてきている。これらの有効性は研究史を参照すれば明らかであるが、しかし、より広範なテキストの展開のなかで人称の範疇や人称表現を観察しなおし、テキストの語りかたを含む多様なレベルでこれをとらえることで、人称の範疇と表現をマイクロのレベルからメゾのレベルさらにマクロのレベルまでに位置づけなおし、テキストの個別性と類型性を取りだすことを、本稿ではもくろむ。この方法によって、テキストにおける人称の範疇と人称表現のありようがテキストのスタイルを問うこととして位置づけられる。

2. 人称の定義と種類

はじめに、一般的に人称の定義と種類がどのように理解されているかを考える。まず、人称の古典的な概念規定として、Jespersen (1924) をとりあげよう。

- (1) In the NED “person” as used in grammar is defined as follows : “Each of the three classes of personal pronouns, and corresponding distinctions in verbs, denoting or indicating respectively the person speaking (*first person*), the person spoken to (*second person*), and the person or thing spoken of (*third person*).” But though the same definition is found in other good dictionaries and in most grammars, it is evidently wrong, for when I say “I am ill” or “you must go” it is undoubtedly “I” and “you” that are spoken of ; the real contrast thus is between (1) the speaker, (2) spoken to, and (3) neither speaker nor spoken to. In the first person one speaks of oneself, in the second of the person to whom the speech is addressed, and in the third of neither. (Jespersen 1924:212)

この規定はJespersen (1933:146) でも一貫しており、たとえば現代のMatthews (2007:295) においてもこれと矛盾するところがない。要するに、言語表現に想定される主体のうち、話し手が1人称、話しかけられる人が2人称で、3人称はその補集合として認定されるのである。ただし、これらは人称を「文法範疇」とみなしており、テキストやスタイルのレベルでの検討を試みる本稿の立場ではいくつかの確認すべき事項がある。(2)に引用するSiewierska (2004) の指摘を見る。

- (2) It is often stated that the grammatical category of person covers the expression of the distinction between the speaker of an utterance, the addressee of that utterance and the party talked about that is neither the speaker nor the addressee. The speaker is said to be the first person, the addressee the second person and the party talked about the third person. This, however, is not quite correct. What is missing from the above characterization is the notion of participant or discourse role. In the case of the first and second persons, the grammatical category of person does not simply express the speaker and addressee respectively, but rather the participant or discourse roles of speaker and addressee. (Siewierska 2004:1)

たとえば印欧語での代名詞は人称の表現だが、固有名詞が話し手や受け手を指示するばあい、固有名詞そのものが話し手と受け手としての参加者役割や談話役割をになうことを示唆しない。これは語彙的な表現として区別される。ここで(2)との関係で、「人称」、「人称名詞」と「人称表現」という概念を識別しておく。

「人称」には、1人称、2人称、3人称を想定する。1人称、2人称、3人称の区別は、(1)に引用したJespersen (1924) の規定を踏襲する。話し手を中心とした指示関係によるのである。

「人称名詞」は、話し手、受け手、それ以外の人をもっぱら指示する「私、あなた、かれ」等をさす。田窪行則 (1997) で採用された用語である。

人を指すとき、この人称名詞のみならず、固有名詞、親族名称、人間名詞を中核とする普通名詞が用いられる。「人称表現」は、これらを包括する概念である。鈴木孝夫 (1973) は次のように述べている。

- (3) 日本語のいわゆる狭い意味での人称代名詞は他の語彙から独立した、一つのまとまった語群を、形体論的にも機能の見地からも形作っていない以上、これだけを切離して扱う意味がなく、むしろ、親族名称、地位名称などと一括して、話し手が自分を表わすことば、および相手を示すことばという広い見地に立って、それぞれを自称詞、対称詞と呼ぶ方が適切であると私は思っている。対話の中に登場する第三者は他称詞と呼ぶことになる。 (鈴木1973:134)

(3)で鈴木という「自称詞、対称詞、他称詞」をとりまとめて「人称表現」と呼び、本稿では、それが話し手が自分を指示するとき1人称、相手を指示するとき2人称、それ以外の第三者を指示するとき3人称という。先のSiewierska (2004) による問題提起は、ここに回収することができる。

本稿では、文学テキストを取りあげる。そこにはテキストを介して語り手と受け手のコミュニケーションが成立し、同時にそこで通達される文学テキストの内部でも主体が指示されコミュニケーションや種々の関係性が成立している。それゆえ、語り手と受け手としてのコミュニケーションの参加者と、登場人物としてのテキストの参加者と、

その双方に人称を認める必要が生じる。そこで、本稿では人称の範疇を、コミュニケーションの参加者あるいはテキストの参加者を指示する働きをもつ表現だと認めておく。これを(4)にまとめておく。

- (4) 人を対象として認定するばあい、人称は、コミュニケーションの参加者あるいはテキストの参加者が相互に任意の主体を指示する関係の範疇である。この主体が、話し手、受け手、それ以外の主体の役割をになうとき、その関係の範疇をそれぞれ1人称、2人称、3人称と呼ぶ。

ところで、Jespersen (1924) は、先の引用の後で、4人称の範疇に言及している。

- (5) Should we recognize a fourth person by the side of the third? This was the opinion of Rask (Vejledning 1811, 96, Prisskr. 1818, 241), who said that in “he beats him” *him* is in the fourth, while in “he beats himself” *himself* is in the third person like the subject. (Inversely, Thalbitzer, in *Handbook of American Ind. Lang.* 1021, denotes by “fourth person” the reflexive.) Yet it is easy to see that if we accept the definition of “person” given above, both these are in the third person, and that no fourth “person” is thinkable, however true it is that the same pronoun or verbal form (in the third person) may refer to different beings or things, in the same or in successive sentences. (Jespersen 1924:220)

Jespersenが引く“he beats him”の例文は、Rask (1811:97) の原文ではデンマーク語で“han slog ham”とある。Jespersen (1924) の説明は(1)と(5)とで一貫している。(5)の記述に続いて「アメリカ・インディアン諸言語」の例が取りあげられるが、これについては近年にいたる研究を概観しておこう。

4人称の日本語による簡潔な解説は亀井孝他編(1996)の「4人称」の項目(無署名)である。この項目では、アルゴンキン語族など諸言語の4人称を5種類に区分して解説するが、4人称が提案されているのは、複文構造や談話における出現のしかた、再帰、不定人称に対する別の呼称、包括的1人称の一種などについてであると言う。

そのなかのアルゴンキン語族に属するブラックフット語の例を取りあげる。まず、Uhlenbeck (1938) の該当箇所をひく。ここでは5人称までが提案されている。

- (6) In Blackfoot, as in Ojibway and other Algonquian languages, we must pay attention to the circumstance, *which person nouns* represent in the sentence. The following cases must be distinguished:
- 1⁰. when they are considered to be the chief third person or persons in the sentence, without being subordinate to any other third person, in which case I use the term *independent form*;
 - 2⁰. when they are subordinate to that chief third person, so that they have the function of a fourth person, in which case the term *obviative* is used;
 - 3⁰. when they are subordinate to such a fourth person, so that they have the function of a fifth person, in which case the term *subobviative* has been adopted.
- The terms *fourth* and *fifth person* were introduced in Algonquian grammar by Father van Ginneken. (Uhlenbeck 1938:29)

これは文の内部における相互の階層関係によるもので、第三者が他に従属することなく出現するばあいが3人称、これに従属して出現するばあいが4人称、さらに4人称に従属して出現するばあいが5人称だということである。Uhlenbeck (1938) のこの考え方は、Frantz (1966) でも同様に維持されているが、Frantz (1971) では、1.2節(7)と2.3節(8)のように、有生の主題に主要なものと卓立性のない従属的なものとが認められている。ただ(8)の説明に見るように、4人称という語は消極的に使用されている。

- (7) Main animate topic 3 vs. less prominent (subordinate) topic 4:
 Within a clause, and usually within a sentence, only one animate gender topic may be assigned to the third person category; any other animate topic (with specific referent, see below) must be marked as less-prominent (traditionally termed ‘obviative’; see also 2.3).
- (a) nohkowa isskonakatsiwa omi aattsistaayi
 my-son-3 shoot-3→4 that-4 rabbit-4

‘my son shot the rabbit’

In example (a), nohkowa ‘my son’ is marked as 3 by suffix -wa; aattsistaayi ‘rabbit’ is marked as 4 by suffix-yi. The T A [引用者注: transitive animate] verb -isskonakat- ‘shoot’ has suffix -yiiwa which is required by this combination of 3 actor, 4 goal. (Frantz 1971:21f(1.2節))

- (8) One of the most salient features of Algonkian languages is the phenomenon termed ‘obviation’. As we stated in 1.2, whenever two or more non-coordinate, animate gender nouns with specific referents occur together, only one may be assigned third person status, the other(s) must be reduced to the subordinate obviative status. We sometimes term this subordinate category ‘fourth person’ (and symbolize it as 4). (Frantz 1971:41(2.3節))

さらにFrantz (2009:13f) にいたると、3人称は‘major third person’と‘minor third person’, すなわちいわゆる「近接形 (proximate)」と「疎遠形 (obviative)」の2種類とされている。これは(7)で、それぞれ‘3’と‘4’として記述されていたものに対応する。

Frantz (2009:13f) における具体的な記述では、“imitááwa ‘dog₃’” や “imitááyi ‘dog₄’” など、‘major third person’の語句に‘3’, ‘minor third person’の語句に‘4’がそれぞれ添字としてマークされているものの、‘fourth person’という呼び方は、採用されていない。この言語のまとまった最初の文献, Uhlenbeck (1938) では(6)に見たように, van Ginnekenの示唆によって4人称と5人称の範疇を導入したとあるが, 現在のFrantz (2009) で, それらは3人称の下位区分として相対化されるにとどまっている。

本稿で, ブラックフット語そのものの検討はなしえないが, 4人称または5人称と呼ばれている範疇に関するかぎり, 3人称の下位区分とみなすことで記述上の不都合は生じないと考える。先のJespersen (1924) の考え方に従うならば, この言語に限っても4人称以上の人称は想定できない。また, Siewierska (2004:7) は, アルゴンキン語族などにふれながら, 4人称というラベルの使用がいずれも談話的な範疇としての性質がないことから, この用語は使用しないと述べている。

次にアイヌ語学において提案されている「4人称」の範疇を確認しよう。

まず, アイヌ語の研究史において田村すゝ子 (1972) は, 「雅語・口語」の範疇を重視した金田一京助 (1960:75f) の記述を批判しながら, 「不定人称」を提案する。田村 (1996:後12) では, 【表1】を掲げて(9)のように述べる。

【表1】

人称	人称代名詞	主格人称変化			目的格人称変化	
		自動詞型	他動詞型		他動詞 《彼が…を見る》	位置名詞 《…の下》
		自動詞 《…が笑う》	他動詞 《…が彼を見る》	名詞 《…の目》		
1 単	káni	ku=mína	ku=nukar	ku=sikihi	en=nukar	en=corpok
1 複	cóka	mína=as	ci=nukar	ci-=sikihi	un=nukar	un=corpok
2 単	eani	e=mína	e=nukar	e=sikihi	e=nukar	e=corpok
2 複	ecioká	eci=mína	eci=nukár	eci=sikíhi	eci=nukár	eci=córpok
3 単	sinuma	mína	nukar	sikihi	nukar	corpok
3 複	oka					
不単	asinuma	mína=an	a=nukár	a=sikíhi	i=nukar	i=corpok
不複	aoká					

- (9) この方言 [引用者注: アイヌ語沙流方言] では不定人称は次のように使われる。

- 1) 一般称《(不定の)ひと》
- 2) 敬意の2人称《あなた様》(通常女性から成人男子に向かって言うときに用いる)
- 3) 包括的1人称複数《私たち, あなたも私も》
- 4) 引用文中の自称《私》《私たち》

これに対し, 中川裕 (1995:9) は(10)のように述べている。

(10) 通常多くの言語において、人称というのは一人称から三人称までしか区分しないが、アイヌ語にはもうひとつ人称区分がある。これは研究者によってさまざまな呼び方と解釈がなされているが、本辞典ではそれを四人称と呼ぶことにする。

この四人称にはいろいろな用法があるが、おおよそ次の四つにまとめられる。

- 1) (話し相手を含む) われわれ。
- 2) あなた (女性から成人男子へ)。
- 3) (不特定の) 人, もの, 誰か, 何か。
- 4) (引用文・物語中の) 私。

(中川1995: 8f)

(10)で言及されている「四人称」の範疇は、(9)の「不定人称」の範疇に一致する。要は、ある人称接辞の範疇をどう呼ぶかという名称の問題であり、これを「不定人称」と呼ぶと、ここで取りあげられている範疇の全体をその一部の用法の名称で代表することになる。「4人称」と呼ぶならば、その全体をひとくくりにして、そこに現れていない名称によって他の人称と連続的に系列化することになる。中川(2011: 補注)では、この範疇について、次のように述べる。

(11) 4人称というのは、人称接辞のパラダイムの中で、a(n)=, =an, i=という接辞のセットによって表される人称のことであり、実際の用法としては包括的一人称複数、二人称敬称、不定人称、引用の一人称などさまざまなものがあるが、その共時的な機能は「1, 2, 3 人称では表せない人称を表す」ということにつきる。

中川による人称の認定の方法は、3人称を1人称・2人称のどちらでもないとみなしたJespersen (1924)の(1)の認定とは、基準が異なると考えてよい (cf. 千野栄一1973)。アイヌ語の記述において「不定人称」と「4人称」のどちらが適切な名称なのか、あるいはそれ以外の名称が想定されるか、上記4種類の範疇を個別に命名しておくのか、などについての判定は保留するが、Jespersen (1924)の考え方を参照する限り、「4人称」という用語は誤解を招きやすいと思われる。

このように見てくると、(4)の規定に加えるべく4人称の範疇を検討する必要は認められないことが主張できる。

さらに、1人称・2人称がコミュニケーションの参加者を指示するのに対し、3人称はそれ以外の指示対象であり、3人称の指示対象を人以外にも適用するとき、例えば松本克己(2010)が次のように述べるところに従うことになる。

(12) しかし、いわゆる3人称は、人間だけでなく発話の中で話題となるあらゆる事象、発話と発話者を取り囲む外的世界の一切をその指示対象の中に取り込んでいるという点で、厳密な意味で人称のカテゴリーを逸脱しているだけでなく、1, 2人称とは全く性格を異にする。[中略]

これまでに知られるかぎり、世界のあらゆる言語は発話の当事者を表す1人称と2人称の形式、および発話外の事物を表す代用形式(=指示代名詞)を具えているが、いわゆる3人称の代名詞は、多くの言語で欠けている。例えば、日本語を含めて東アジアのほとんどすべての言語は、特に3人称と呼ばれるような代名詞を本来持っていないかった。(松本2010: 11)

(12)で指摘されていることがらは、草野清民(1901)により、既に次のように言及されていた。

(13) 指詞ハ事物ヲ呼ブニ其名ニ因ラズシテ、單ニ之ヲ指シシテ呼ブ詞ナリ。「これ」「それ」「われ」「たれ」ノゴトシ。[中略]

人ノ指詞 マタ定、不定ノ二種アレドモ、定指詞ニハ第一、第二ノ二稱アルノミナリ。之ヲ人稱トイヒ。自稱、對稱、或ハ第一人稱第二人稱トイフ。[中略]

人ノ指詞ニ固有ノ第三人稱ナシ。ソノ代リニ人ヲ事物ト見テ前ニ陳ベタルガ如ク、ソノ自己ニ近キトキハ、「これ」ヲ用井、(「これ」トモイヒ難キ場合ニハ、「この人」ナド、イヒテ語ヲ寛ニス) 對者ニ近ケレバ「それ」ヲ用井、兩者ニ對シテ同ジキ距離ニ在ルトキハ、「かれ」「あれ」ヲ用井ル。(草野1901: 65ff)

人称として「第一人称、第二人称、第三人称」の3種類を認めつつ、日本語の指示の体系を考慮して、固有の3人称が語彙的に欠けることを明らかにしている。このことについての文学表現に関わる経緯は野口武彦(1994)に詳し

い。

以上の検討により、(4)は(14)のように書き換えられる。

- (14) 人を対象として認定するばあい、人称は、コミュニケーションの参加者あるいはテキストの参加者が相互に任意の主体を指示する関係の範疇である。この主体が、話し手、受け手、それ以外の主体の役割をになうとき、その関係の範疇をそれぞれ1人称、2人称、3人称と呼ぶ。1人称と2人称には日本語固有の人称名詞が認められ、3人称には人称表現が語彙的に導入される。

3. 文学の領域における人称範疇の拡張

前節で4人称の範疇を設定する必要を認めなかったが、ブラックフット語やアイヌ語に見るような形態との関係であれば、資料となるテキストのジャンルにかかわらず、言語学における議論に還元することができる。これに対し、文学または文学研究の領域で4人称がとりあげられることがある。本節ではこのことを検討する。

まず、しばしば言及される横光利一による4人称の概念を確認する。

- (15) 登場人物各人の盡くの思ふ内部を、一人の作者が盡く一人で摺むことなど不可能事であつてみれば、何事か作者の企畫に馳せ参ずる人物の廻轉面の集合が、作者の内部と相關關係を保つて進行しなければならぬ。このときその進行過程が初めて思想といふある時間になる。けれども、ここに、近代小説にとつては、ただそればかりでは赦されぬ面倒な怪物が、新しく発見せられて來たのである。その怪物は現實に於て、着々有力な事實となり、今までの心理を崩し、道德を崩し、理智を破り、感情を歪め、しかもそれらの混亂が新しい現實となつて世間を動かして來た。それは自意識といふ不安な精神だ。この「自分を見る自分」といふ新しい存在物としての名稱が生じてからは、すでに役に立たなくなった古いリアリズムでは、一層役に立たなくなつて來たのは、云ふまでもないことだが、不便はそれのみにはあらずして、この人々の内面を支配してゐる強力な自意識の表現の場合に、幾らかでも眞實に近づけてリアリティを與へようとするなら、作家はもはや、いかなる方法かで、自身の操作に適合した四人稱の發明工夫をしない限り、表現の方法はないのである。もうこのやうになれば、どんな風に藻掻かうと、短篇では作家はただ死ぬばかりだ。純粹小説論の起つて來たのは、すべてがこの不安に源を發してゐると思ふ。「すべて美しきものを」と浪漫主義者は云ふ。しかし、現代のやうに、一人の人間が人としての眼と、個人としての眼と、その個人を見る眼と、三様の眼を持つて出現し始め、さうしてなほ且つ作者としての眼さへ持つた上に、しかもただ一途に頼んだ道德や理智までが再び分解せられた今になつて、何が美しきものであらうか。
(横光利一1935「純粹小説論」『定本横光利一全集13』河出書房新社)

ここで横光は、「自意識」すなわち「自分を見る自分」を「新しい存在物としての名稱」とみなす。これが「四人稱」であるが、作家が「自身の操作に適合した」ものとして「發明工夫」する対象である。これについて横光の参加する座談「「純粹小説」を語る」(1935)において、中島健蔵が次のように発言している。

- (16) それからつまりその四人稱が肉體を持つとなると、「私」になつたり「私」以外のものになつたりする。
(中島健蔵、横光利一他1935「「純粹小説」を語る」『定本横光利一全集15』河出書房新社：p.200f)

- (17) 四人稱といふものがある事は困らないけれども、それが、他の人稱に色々つつく事が困る。どうしても自意識があればそれにまた氣がつくし、いつの間にか變な所へくつつくのが困るんぢやありませんか。(同)

中島健蔵の発言は、横光によってすべて肯定されている。以上の引用から、横光の「四人稱」は、言語学的な範疇としての人称とは次元がことなることが明らかで、「自分を見る自分」を人称として比喩的に拡張したものと理解できる。

これに対して藤井貞和(2001, 2003, 2004)の考え方がある。藤井は物語論のたちばから、アイヌ語の研究史を参照しつつ、次のように述べる。

(18) 主人公たちが、みずからを語り、あるいはみずからの視野で思ったり、見たりする語りを、「四人称を持たない、諸言語」(欧米語、日本語など)の場合には、一人称で表現されると認定されるとし、それに対して、主人公たちが、みずからを語り、あるいはみずからの視野で思ったり、見たりする語りを、もしアイヌ語のように包括的一人称複数か、あるいは引用の一人称か、呼称にはこだわらないものの、一人称でない人称で表現するならば、それを四人称と認定しようと思う。物語世界の表現に四人称を持つ言語(アイヌ語)が世界諸言語のうちにあることをふまえ、あくまで物語の文法の範囲ということで、必要な場合に「四人称」を立てることにした。

(藤井2004:143)

(19) 以下の一覧を試みる。物語の人称の下には談話の人称を併記して相違を示す。

	物語の人称	談話の人称
物語人称	四人称	—
三人称	三人称	三人称
二人称	二人称	二人称
一人称	一人称	一人称
語り手人称	ゼロ人称	ゼロ人称
作者人称	無(虚)人称	—

- ・ 物語人称 作中人物、場面、話題(=三人称)について、その会話、心内などを語り、また語り手の語り
に、作中人物の心情が色濃くかさなる
- ・ 三人称 作中人物、場面、話題……など
- ・ 二人称 聴き手、あいづちを打つ人、非在の読者
- ・ 一人称 草子地における語り手の「われ」その他

会話については、会話主が一人称、会話のあいてが二人称、話題その他が三人称となる(厳密には、それぞれ四人称、五人称、六人称……となるかもしれない)。さらに、みぎに言ったように、語り手そのひとを物語では必須とするから、その人称を立てる。

- ・ 語り手人称 語りの担い手

語り手と作者とを分けることも、物語では普遍的だから、

- ・ 作者人称 物語文学の作り手

として、絶対的な無(虚)人称を立てる。

(藤井2004:165)

藤井の認識は、アイヌ語の研究史を前提にしているとすれば、田村や中川によって明確にされている範疇を雑然と認めたまま「四人称」という名称を使用していることになる。さらに、これを「六人称」などに拡張しようとするのは、テキストの参加者の間に疎遠性を相対的に導入することとなり、「厳密」な認定基準をたてることは困難だと考えられる。語り手や作者の人称をどのように規定するかは別途検討することとし、ここでは藤井の認識には立ちえないことを明らかにするとどめる。

4. 文学テキストにおける人称とコミュニケーションの回路

筆者は、野村(2000, 2005, 2008)などで、現代日本語による文学作品に現れる多様な人称の組み合わせや効果を検討した。本稿では、文学テキストの参加者(登場人物)やコミュニケーションの参加者と人称表現の関係性をとりあげ、文学作品にかかわるコミュニケーションの回路がどのように構築されるのかを例にそくして検討する。文学テキストの地の文における人称の組み合わせのタイプのモードを【表2】のように規定しておく。【表2】の“1”はその

【表2】テキストにおける人称の組み合わせ

人称 \ モード	A	B	C	D	E	F	G	H
1人称	1	1	1	1	0	0	0	0
2人称	1	1	0	0	1	1	0	0
3人称	1	0	1	0	1	0	1	0

人称が当該のテキストまたは部分テキストの地の文に出現し、“0”は出現しないことを表す。また、A・C・E・G以外の類型が全体を構成している小説・物語は、現時点で実例として見だしにくい。また、各モードが部分テキスト間で変換される例はすくなくない。

先ず(20)を観察しよう。倉橋由美子『暗い旅』（東都書房）である。このテキストの人称の組み合わせのモードは、類型Eで一貫している。この部分テキストを独立させて理解するばあい、2人称「あなた」の指示対象にはどのような属性が付与され、コミュニケーションの回路がどのように構築されうるかを考える。

(20) 品川でおりて、山手線に乗りかへる。澁谷、ちやうど五時だ、玉川線、井之頭線、地下鐵、そして國鐵から吐きだされては吸収されていく人間たちが黒い羊の群のやうに渦巻き、肩をゆすっておしひしめいてゐる。檢札に襲われなかつたので、あなたは鎌倉からの十圓區間の切符をコートの内ポケットにしまひこみ、《吉祥寺——御茶ノ水》の定期をみせて清算所で十圓拂ふと、氣をよくしながら夕方の雑踏にまぎれこむ。なぜあなたは澁谷でおりて井之頭線で帰らうとするのか、なぜまつすぐ東京驛までいつて中央線で歸らなかつたのか？ 澁谷からのほうがいくぶん早いといふだけではない、あなたはこの井之頭線が好きなのだ、その理由はあなたにもよくわかんない……
(倉橋『暗い旅』東都書房：70)

「あなた」の姓名は明記されていない。引用の部分テキストに、「あなた」の性別や年齢、職業などを特定する要因は少ない (cf. Fludernik 2006/2009: 44)。夕刻、鎌倉から東京の都心部を国鉄の各線を経由して移動するのであるが、定期を所持していることから通勤者または通学生であろうことは推定可能である。帰宅する目的地は吉祥寺であり、普段の移動には中央線を利用しているが、この日は通常の移動とは異なる状況におかれている。

(20)の引用部の前半は「あなた」の移動が話題の中核を占める。文末は非タ系列であり、その移動の時間がテキストを読む過程と同期する効果をもたらす。「あなた」は乗客たちを観察するダイクシスの中心に位置する。

(20)の後半では「なぜ……のか」という表現が反復され、このことによって語り手から「あなた」への問いかけがなされている。この語り手は1人称者として顕在していないので、「無人称の語り手」^(註1)と仮定する。このとき、問いかけがテキストの内部で完結していると理解すれば、この問いかけはコミュニケーションの参加者である語り手とテキストの参加者、つまり登場人物である「あなた」との間に、あらたなコミュニケーションが成立しているとみなされる。これに対して、テキストの現実の読み手が「あなた」に対して高い共感性を認識しているとすれば、語り手から現実の読み手へのコミュニケーションが一定の様相で構築されうる (Fludernik 2006/2009: 50)。2人称「あなた」の指示対象を読み手自身とみなす理解の方法である。このことは(20)の叙述表現が非過去の形態を選んでいることによって補強され (cf. 工藤真由美1995: 214f)、さらに感情・思考の述語「好きなのだ」「わからない」も共感性を高めることに機能する。

ただし、この共感性は読み手の属性とテキストの理解のしかたによって制約される。上では(20)を独立させて理解することを前提としたが、小説の冒頭は次のように開始されている。

(21) 光明寺行きのバスがでるまで、十五分以上も待たなければならない、急いでゐるわけではないが、あなたはいらいらしながらバス乗り場をはなれて驛前広場を横切る。右側に西武百貨店、左側にあなたとかれがよくバヴァロアやエクレアを食べたことのある風月堂、そして観光都市らしく土産物を並べた店……あなたにとつてはまつたく見慣れた鎌倉の驛前だ、しかしいま鎌倉は二月の埃つばい寒氣のなかであなたによそよそしい顔をみせてゐる、まるで、目的のない旅行者、いかがはしい、空虚な眼をした異邦人でも迎へるやうに。 (同：7)

ここで「あなた」により指示されている人物の属性は、第1文だけでは確定しにくいだらう。移動にかかわるダイクシスの中心は「あなた」の位置と一致し、文末は非タ系列である。第2文で「あなたとかれ」が驛前の風月堂で「バヴァロアやエクレアを食べた」とあるところから、人称表現と風月堂の店名、メニューに依拠したジェンダーに関わる知識から、読み手は「あなた」が若い女性であることを推測する可能性がたかい。この条件下では、(20)の「あなた」に対する共感性は、個々の読み手の具体的な属性に応じて異なるはずである。

このテキストでは、2人称者「あなた」と読み手の関係性に高い共感性が認められ、語り手とのあいだにコミュニケーションの成立が想定できるばあいから、性別・年齢・社会的なありようにおいて差異化され、共感性が低いばあいまでが連続的に仮定される。この様相に応じて、テキストを媒介させたコミュニケーションの回路は動的に変化するとみなされる。2人称の使用によって、これを欠く類型Cや類型Gのモードのばあいとは異なった、テキストの参加者と読み手の関係性が構築され、その関係性は、あらかじめ予測しにくい具体的な読み手の属性に応じて偶発的に

規定されるのである。

次に、小島信夫『別れる理由』（講談社）をとりあげる。この作品は長編であり、その発表の過程で人称の組み合わせのモードが変化する。雑誌への掲載回数が節の番号とされていて、全150節からなる。冒頭から第107節までは、描出表現^(注2)や自由直接思考の表現が認められるが、類型Gのモードで安定して展開する。ところが第108節の(22)にいたって、自由直接思考とも自由直接発話とも認定できない地の文に、1人称「私」による言及がある。類型がGのモードからCのモードへ転換したことになる。この段階で、テキストがAのモードであることを認定する標識はない。

- (22) 白い馬は威嚇なんかしなかったといっぺやる方が、相手のためであろう。永造だって威嚇なんかしたのではなくて、親愛の情を示したにすぎなかった、と私は思う。腹をすえてかかれば、何をおそれたり、おどしたりすることがあろう。たとえば永造が本物の馬でなくて馬の仮面をかぶり、すべての動作が馬と同じになっているとしても、そのような役をしているという意味において、本物よりも意識のうえではるかにまさっていることは間違いない。
(小島『別れる理由』Ⅲ講談社：63)

この「私」の指示対象が誰であるのか、先行文脈との関係で前方照応的に特定するのは困難である。テキストの中心となる参加者は「永造」だが、(22)を永造の自由直接思考の表現だとみなしにくい。この1人称者の属性は、永造の行為または意志を外部からに観察しうる主体である。そうすると、この「私」にはテキストの語り手または作者と呼ばれる主体が擬される可能性がたかい。このことを一つの仮説として次の部分テキストを観察する。

- (23) それはともかくとして、『別れる理由』というこの作品では、いまトロヤ平原のテントの中や外で、(たぶん今は外に出て明け方の空の下で)彼らは対峙していると思っていただきたい。[中略]
それに立ちどまるということは、必要なことであるどころか、小説(としておこう)や散文の一つのポイントなのである。私の文章はどうなったつけ。もとへ戻ろう。要するに十年続いてしまったので、これを批評しようとする、まる一年はかかるというのである。作者である私は、この計算をきいていて、それ以前の座談のときと同じく朦朧としていた。多少酒が入っていたからかもしれない。
(小島Ⅲ：135f)

(23)には、このテキストのタイトルに対する言及に続いて、1人称「私」による言及があるが、ここでは「作者である私」と属性が明示されている。この1人称者が(22)の「私」と同一指示であるとすれば、(22)では「作者」が作品に対して感想を述べていることになる。(23)にいたると、テキストそのものを表現し操作する能力、たとえば「立ちどまる」ということや、このテキストを現実書き進めるときに操作としての「もとへ戻ろう」のようなメタ言語表現があり、このことは「作者である私」が観察者としてテキストに言及することを意味する(野村2000：129)。1人称の「私」はこのテキストを対象としたコミュニケーションの参加者としての関係性をにない、このコミュニケーションの受け手は、仮構された読み手あるいは現実の読み手である。この事情は(24)で見るとテキスト内に記述されている。

この段階で読み手が、「作者」をテキストの参加者、つまり登場人物として想定するか、あるいは現実の小島信夫を想定するかを理論的に識別することには、意味がない。

- (24) 読者よ、編集者よ、今しばらく読者とじかに話をすることを許されよ。こう呼びかけるだけで、『別れる理由』の作者は、まるで、ほんとうにすぐ目の前に読者がいるような気がしてくるのである。すべては作者自身のせいではあるとはいえ、前には声をかけてきたものも声をかけなくなり、また新しく声をかけはじめたものも、その後私の横をだまって通りすぎるようになり、そうしてまた新しい読者があらわれたが、それ、このようにして私は群衆や通行人の中をひとり歩いているように思えてならない。
……中略……

たぶんそう作者は思ったのであろう。なぜかという、作者本人がいうことはあんまりあてにはならぬからである。だが信用するより仕方がない。何しろ本人なのだから。それに私は筆のあとをついて行く以外方法はない。いつも私は筆のあとをついて行くのである。
(小島Ⅲ：145)

ここで「作者」は「読者」と「編集者」に呼びかけ、「話をすること」の許可を要求している。「作者」は1人称者として機能し、テキストの類型がAに転換したことになる。呼びかけ表現と行為要求表現は、その相手すなわち2人

称者への直接のコミュニケーションの成立が前提となる、あるいはその成立が仮構されるからである。(24)ではこの仮構は、「眼の前に読者がいるような気がしてくる」という視覚的な観察にかかわる比況の表現に反映している。呼びかけと行為要求の表現は、コミュニケーションの場において1人称者から2人称者へ通達されるのであるが、この部分テキストで「読者」は唯一の対象として指示されていない。「新しい読者」が規定され、読者は「群衆や通行人」に擬せられる。この意味において、このテキストでいう「読者」は必ずしも唯一の現実の読者と同一指示にはならない。と同時に、呼びかけの相手としても位置づけられている。そのような唯一性と複数性の両面が「読者」に見いだされるのである。それゆえ、現実の個々の読み手にとって、(24)の「読者」と自分が同一指示であることを仮定する余地は残されており、これを理論的に否定することは困難である。

(24)の最初のパラグラフで、「作者」の呼びかけと行為要求は実体化されているが、次の「たぶんそう作者は思ったのであろう」のパラグラフに移ると、作者が自己観察をすることによってその呼びかけと行為要求が思考の対象として位置づけられる。しかし、(24)をつうじて、この「作者」と1人称者「私」が同一指示であることを否定する要因は認められない。ただ、「筆」をどのような実体として理解するかに応じて、「筆」を操る「作者」と、これに「ついて行く」「私」とを差異化することは可能である。

このように見てくると、(24)において、2人称者としての「読者」は唯一指示と複数の指示との両面をにない、また「作者」と「私」は同一指示かいなかの両面をになっており、その理解に揺れが生じており、多様な組み合わせが可能だといえる。次の引用では、テキストの参加者(登場人物)に、コミュニケーションの参加者としての位置が付与される。

(25) 実は昨日も永造は私のところへ電話をかけてきた。あなたは私との間柄にこだわって色々と吹聴しているようだが、こっちだってあなたのことは心配している。この心配しているには、ひそかに笑った。もっともきこえたかもしれない。きこえなくとも笑ったと思ったに違いない。(小島Ⅲ：161)

(26) 『別れる理由』の作者は、ほんとうは今回あたりは、いくら何でも『別れる理由』の本文の中へもどって行くつもりであった。ところが締切日を知っている前田永造は、私がいよいよ本文のことを考えはじめるときを見はからうようにして、私のところへ長電話をかけてきたのであった。(小島Ⅲ：163)

(25)は、テキストの中心的な参加者である「(前田)永造」と「私」すなわち「作者」が電話で話す場面である。ここで永造の発話は自由直接発話によっているので、その発話のなかで、作者である「私」は2人称の「あなた」で指示されている。この意味で、この部分は通常のコミュニケーションとして描写されている。「こっちだってあなたのことは心配している」は、永造の感情を観察の対象とした永造による自己言及とみなされる。(26)では「作者」と「私」は同一指示の1人称者である。この「作者」が、作品の執筆計画を叙述しながらテキストの参加者の「前田永造」とのあいだでコミュニケーションをたもっている。

以上、観察してきたように、このテキストでは、「作者」「私(作者と同一指示)」と「読者」「編集者」およびテキストの参加者である「前田永造」とのあいだにコミュニケーションが導入され、そのコミュニケーションの過程で作者と前田永造は、それぞれ自己観察または自己言及をおこなっている。ただ、現実の読み手は作者からのコミュニケーションの相手としての認識をもつことは可能だが、唯一の2人称者であるテキストの参加者としてテキストの中に自己を見いだすだけの能力はあたえられていない。「新しい読者」が想定されると同時に、その読者とのあいだで相対化される主体としてあるにとどまる。このようなテキストのシステムが、テキストの進行にしたがって構築され、順次、テキストの参加者の関係性、コミュニケーションの参加者の関係性、およびその両者を結びつける関係性において、複雑性を増大させる趣を呈している。これに応じてコミュニケーションの回路は変化を継続する。

これまでに見た倉橋由美子『暗い旅』や小島信夫『別れる理由』では、例えばLeech and Short (1981)で代表されるような、対称的な入れ子型として想定された物語の談話構造の図式、つまりコミュニケーションの回路の安定性が破綻をきたしていることは明らかである。あるいは、そのような対称性を破ることに倉橋や小島のテキストが貢献していると理解することもできよう。

三つ目の作品として、津島佑子『黄金の夢の歌』(講談社)をとりあげる。巻末に引用文献や参考文献が列記され、作品の舞台となる地域の地図が掲載されている。このテキストは、おおむね章を単位として、人称タイプのモードがCとEとで順次転換をくりかえす。章は、0、1と続き、14、00で終わる。都合16章である。第1章には「わたし」の父親が青森出身であること、第12章に「あなた」が三十年近く前に「男の子」を失っていること、第00章に「あなた」が十和田湖で泳いだ経験のあること、が記されている。「わたし」と「あなた」がテキストの参加者とし

て同一指示であることは容易に理解できるが、このテキストの読み手にそれらの文学史的な知見が要求されることはない。

テキストの主題は明確で、次の引用に集約されている。

- (27) 夢のなかにしかあらわれないキルギスの英雄マナス。その歌を聞きたい。じつのところ、わたしはそれだけしか考えていなかったのだ。
(津島佑子『黄金の夢の歌』講談社：16)

この目的のために、「わたし」すなわち「あなた」が、キルギス、中国東北地方を旅行する過程がテキストの中軸をなす。人称の観点からのモードはCとEの2種類である。テキストの時間的・場所的な関係性、具体的な話題、参加者、構成要素の観察可能性、テキスト相互の言及などは、主に章を単位として系列化することができる。

テキストの場面を構成する場所は、東京、キルギス、黒竜江省、内蒙古自治区に大別される。場所の特定は時間の特定と相関する。場所を東京とするのは、テキストを執筆している2010年4月以降の記述であり、人称の類型はCのみである。キルギスには、2008年6月から7月に滞在し、テキストの人称のモードはCとEである。黒竜江省から内蒙古自治区には、2008年9月に滞在し、テキストの人称のモードはCとEである。キルギス、黒竜江省、内蒙古自治区を場とする部分がテキストの大半を占め、かつテキストを通じて時間の経過と場所の移動がかかわる。

場所・時間の変化と複合して、テキストの話題、参加者、構成要素の観察可能性、テキストへの言及の方法などが変化する。まず、場所の移動に言及する部分テキストである。モードEの(28)とモードCの(29)だが、これは人称のモードにかかわらず客体化された表現方法が選択されている。(28)の2人称者の思考については描出表現が用いられるが、これ以上の感情表現や複雑な表現技法は認められない。ただ、人称のモードの変化があるため、このテキストを日常的な紀行文とみなすのは困難である。

- (28) ビシュケクに着いてからあれやこれやの用事に追われ、ようやく三日後に、あなたはタラスに向かった。マナスの根拠地だったとうたわれているタラスには、「マナスのお墓」がある。

マナスのお墓？ はじめて聞いたとき、あなたはつい笑ってしまった。だって、マナスは「夢の歌」の英雄なのだから、現実のお墓などあるわけがない。日本にもよくある「義経ご幼少のみぎりのしゃれこうべ」と同じ口かな、と首をかしげつつも、そうした伝承があるからには、マナスにちなんだなにかがある土地なのになにかない、そう、本物ではなくても、とにかくお墓参りはしなければ、と心を決めた。

旅行会社でちょうどいってきた地図を開いて、ウルビュさんがあなたに言った。かれはあなたの、もうひとりの弟のような日本人で、根っからの旅行好きなので、喜んであなたの「マナス計画」に乗ってくれた。「弟」がそばにいてくれると、なにかと心強いし、男と女だということをあまり意識しないでいられるのも助かる。それでいて明らかに、女同士よりどことなく楽しい。
(津島：36)

- (29) 朝八時二分、終着駅ハイラルに列車は到着した。駅の表示板には、「海拉杯」という漢字とともに、縦書きのモンゴル文字も書き記してあった。ハイラルとは、モンゴル語で「流れる水」という意味。

プラットフォームにおりたつと、気持のよい引き締まった空気に体が打たれる。まだ九月上旬だというのに、駅員たちはみな、ずっしりした黒い外套（この言葉をあえて使いたくなるような、ダブルのロングコート）を着こんでいる。

わたしとバカイさんは列車からおりてまっさきに、大きく息を吸いこんだ。
(津島：198)

次の例は、一つの章のなかで人称のモードが転換される部分テキストで、このテキストではまれな例である。2010年6月の東京に記述の中核をおいている部分テキストをCのモード、東京から離れて2008年の夏に記述の中核を移した部分テキストをEのモードで表現している。ここでは、時間と場所の選択と人称の類型の選択とが相関していることが観察される。先に述べたように、東京を場所とする部分テキストではCのモードが選択される。

- (30) 二〇一〇年六月、東京で再会した「愛国青年」ボーベクくんは、わたしたちに言った。

——……ほくだって、前の大統領のバキーエフを熱心に支持していたんですよ。このひとならだいたいじょうぶだろうって。

……中略……

二年前、ウマに乗ってたどり着いた山の一角には、ピンクの花が咲き乱れていた。黄色いタンポポも咲いてい

て、古い座布団を背中にくくりつけられたウマたちは、ここぞとばかりに新鮮な草を食べていた。そのさまを見ていると、人間であるわたしまで草を食べてみたくなるほどの勢いで。

トット、トット、タン、ト

二〇〇八年の夏、キルギス中部のナリン近郊の村で、あなたたちは念願のウマでの散歩を果たした。それは、ボーベクくんの知り合いの配慮だった。近くの農家からかき集めたウマたちだと聞いたけれど、あなたの眼にはりっぱなウマたちだった。(津島：276ff)

(30)における人称のモードの転換は、場所の転換と対応している。この転換において前後の部分テキストをむすびつけているのは、「トット、トット、タン、ト」というマナスの唱謡において反復されるリズムの転写である。これは、日本語のテキストにおいては概念的な意味を明確に持ち得ない音連続であり、マナスの唱謡、またはそれにまつわる多様な情報を選択させる契機として機能する。(30)ではウマに乗ることが、このリズムの転写の前後で一貫している。それは(31)に記された印象とも系列をなす。ただし、このリズムが記載されている部分テキストに常にウマに関する記述があるわけではなく、(30)はリズムがウマの話題の文脈に生じることに於いて、むしろ例外的である。外に、マナスの引用の文脈、マナスを話題とする文脈、マナスに関わる想像をめぐらす文脈などを中心として、パラグラフの句切りが生じた箇所に1行、まれに2行が挿入されている。

(31) あなたの耳に、マナスの歌がよみがえる。

前の日にビシュケクのユネスコ事務所で聞いた歌声だったけれど、このジャイロ [引用者注：氷河谷の放牧地] にこそ、マナスの歌はひろがっている、とあなたはまたしてもひとり決めの、ロマンティックにすぎるかもしれない想像にひたりたくなる。

それは、どこかうまの走りのリズムを、あなたに感じさせた。四拍子でうたわれ、三拍めが強く跳ねあがる。トット、トット、タン、ト、という感じ。

この四拍子ははじめゆっくりとはじまり、場面が高揚してくると、どんどん速くなる。(津島：52)

さて、(28)や(29)のような移動の過程で、各地の歴史的な記述が展開される。この記述において、明らかに伝聞の形式が選択されている部分と、巻末に挙げられている文献などから直接引用された箇所とがある。

「わたし」または「あなた」が移動の過程で聞いた「夢の歌」と呼ばれる叙事詩の引用も同様の表現方法によっている。(32)は「夢の歌」の日本語訳を引用したもので、部分テキストの人称の組み合わせはCのモードである。

(32) わたしたちはボズウイの奥に置かれた低いテーブルのまわりに適当に坐り、ゲストハウスの主人たちはボズウイの右側に並んでいる。マナスの歌を聞くよりは、たいせつな車の手入れをしたいチャリクさんは、この場にはいない。

……中略……

英雄マナスにも、サンジェラがぜひとも必要なだった。そのためには、初代のマナスが息子を死ななければならぬ。そうしてこそ、「夢の歌」が流れていく。

トット、トット、タン、ト

☞ ……われわれはキルギス人に向かって進んだ。槍の深さにまでも積もった雪をかきわけて道を作った。

……中略……

バイルクの白馬の腿を射った。われわれはキルギス人のカガンを打ち破って、王国を征服した。(キョル・テギン王子のために建てられた石碑の碑文を、『トウバ紀行』メンヒエン＝ヘルフェン著 田中克彦訳から抜粋。これを書き記したのは、六八二年に復興した「第二突厥」の王ビルゲ・カガンで、キョル・テギンの兄)

(津島：61ff)

この「夢の歌」に歌われる男の子の声が、しばしばテキストに出現する。Eのモードで表現されたプロローグとエピローグに相当する第0章と第00章、および第13章にも、その声が聞こえ、眼に影が映るが(p.13ff, p.377f,

p.413ff), 鮮明な記述はない。これ等の章を除くと、男の子の声は第5章, 第7章, 第14章で記述され, この3つの章はすべて(33)に見るようなCのモードによっている。男の子は自分を「ぼく」と呼び, この男の子と「わたし」が対話を続ける。Eのモードの第0章と第00章でも「ぼく」と「あなた」の対話が展開されているので, 男の子と対話を表現することは人称の組み合わせに制約されない。

(33) オオカミのプライド, 家族に対する情愛の深さ, したたかな計略, 忍耐力, そうしたすばらしい性格を, 人間たちは見習い, 自分たちのトーテムとし, 物語も作った。

……そうだよ, 今ごろ気がついたの?

わたしの耳もとに, だれかの声が聞こえてくる。

……ぼくたちはみんな, ほんとはオオカミなんだよ。当たり前じゃないか。夢のぼくたちにはだれも, 人間らしさなんて求めているない。

……中略……

いよいよ出陣するときは「アルプ (偉大な) ・カラ・クシュ (鳥) が天空いっぱい翼を広げ, 爪を立てて, マナスにお供し, ありとあらゆる猛獣が四方八方からマナスを取り囲んでいた」ってことになるんだ。それって, 本物のイヌワシをやたらでっかくしたようなとりのことだけどね。

<なんだか, シンドバッドの冒険みたい>

わたしは声に出さずつぶやき返す。

……中略……

……ねえ, ぼくもいるよ, ともうひとりの男の子の声も聞こえる。

ぼくは, ゲセル。モンゴルの「夢の歌」から生まれた。

……中略……

男の子は自慢そうに声をあげる。

<まったくどうして, そんなに「夢の歌」の男の子たちは乱暴なの? ひどすぎない?> (津島: 129ff)

津島のテキストは, 人称のモードがCとEであり, これがテキストの内容である場所の移動, 「夢の歌」や歴史書の引用, 「男の子」の声や影の描写と対話と組み合わせられている。要するに, 2種類の人称のモードと内容との直積でテキスト全体が構成されているのである。第9・11章をのぞき, 章を単位として人称のモードは一貫している。第9章と第11章が例外になるのは, 先に述べたように, 語り手が東京にいるばあい人称のモードはCだが, この2つの章では, 東京とキルギスでの記述が併存していることによる。ただ, ともにCのモードは章の冒頭部分にかざられるので, 大局的には第0章から第11章まで人称のモードはEのモードに始まり, 以下CのモードとEのモードが交互に選択されているとみなしてよい。以下, 第12・13・00章がEのモード, 第14章がCのモードである。

語り手は, Cのモードのばあいは「わたし」と一致するとみなされ, Eのモードでは「わたし」と同一指示だと理解される「あなた」がテキストの参加者の中心になるので, 語り手は無人称となり, 2人称者の思考や感情に対する描出表現が生じる。

さて, これまで3つの作品をとりあげて, それぞれテキストとしての人称のモードとコミュニケーションの回路とを整理してきた。最後に人称のモードの転換と語り手のありようを整理しておく。

先の【表2】のうち, 現実に作品として例示できるのは, A・C・E・Gの4つの類型である。1人称が現れるAとCの類型は, 1人称者が語り手の役割を果たしているとみなす。EとGの類型では, 1人称者が現れないため, 人称性が認められない無人称の語り手を仮定する。それぞれのテキストの参加者は, テキストにおいて中心的な (central) または周辺的な (peripheral) 役割をになう。前者が主人公と呼ばれる参加者である。このことは1人称の語り手についても同様に役割として識別される。ただし, 1人称者が常に中心的な役割を担う必然性はなく, Aの類型では2人称者か3人称者, Cの類型では, 3人称者のいずれかの参加者が中心的な役割を担う可能性がある。Eの類型では, 感情形容詞の人称制限の現象を整理すると, 2人称者に無標形式が現れ, 高い共感性が認められることから (野村2007), この2人称者に「中心的」の属性が割り当てられる。Gの類型は, テキストの参加者がすべて3人称者であるため, 中心的か周辺的な属性は, 人称そのものでは規定されず, 相対的に決定されることになる。

以上のことを表にまとめると【表3】のようになる。これは【表2】のA, C, E, Gについてそれぞれのタイプのテキストの参加者が語り手であるか, また中心的か周辺的なかについて, その組み合わせを系列化して記入したものである。組み合わせの各系列の型は, 添字を付して下位区分した。たとえばA₁やA₂は, 人称の組み合わせのAの

【表3】 テキストにおける人称の組み合わせと参加者の中心性、語り手の人称

人称 \ モード	A	C	E	G
1 人称	1 A ₁ : narrator ∧ central A ₂ : narrator ∧ peripheral A ₃ : narrator ∧ peripheral	1 C ₁ : narrator ∧ central C ₂ : narrator ∧ peripheral	0	0
2 人称	1 A ₁ : peripheral A ₂ : central A ₃ : peripheral	0	1 E ₁ : central	0
3 人称	1 A ₁ : peripheral A ₂ : peripheral A ₃ : central	1 C ₁ : peripheral C ₂ : central	1 E ₁ : peripheral	1 G ₁ : central ∨ peripheral
人称なし	0	0	E ₁ : narrator	G ₁ : narrator

(∧は連言, ∨は強選言を意味する)

モードにおいて、それぞれ同一のアルファベット・添字のものが、語り手、中心的、周辺の属性の組み合わせになる。各部分テキストは、A₁、A₂などのどれかの組み合わせによって構成されており、その組み合わせはテキストを通じて一貫するばあいもあるが、本稿で取りあげた例のように、テキストの人称のモードの選択に応じながら、部分部分で転換することがある。さらに、これに応じてテキストの語りかたの性質も変化する。この選択、転換と変化が個々のテキストのスタイルを規定するのである。A₂、A₃、C₂の1人称は、機能的に無人称（人称なし）に近似する。

以下に【表3】の各類型に該当する文学作品名を、例示しておく。A₁ 糸山秋子『袋小路の男』、A₂ 重松清『疾走』（第21章以下の部分テキスト）、A₃ 小島信夫『別れる理由』（第108節以下の部分テキスト）、C₁ 大城立裕『カクテルパーティー』（前章）、C₂ 松山巖『蟻』『猫風船』、E₁ 大城立裕『カクテルパーティー』（後章）・倉橋由美子『暗い旅』・津島佑子『黄金の夢の歌』（部分テキスト）、G₁ 庄野潤三『静物』。

5. まとめ

- 1) 人称は、1人称、2人称および3人称が認定される。4人称以上を認める必然性はない。
- 2) 文学作品において、人称の組み合わせとしてのモードが各テキストまたは部分テキストにおいて類型化され、また部分テキスト間でモードを自由に転換させることができる。また、この転換がテキストの語りかたの性質を変化させ、ここに人称がテキスト内でスタイルを差異化させる可能性が認められる。
- 3) 文学作品において、作中人物の2人称者が読み手と同一視される可能性がある。
- 4) 文学作品の作者・語り手と読み手との間に直接のコミュニケーションが成立しうる。
- 5) 文学作品の作者・語り手と作中人物との間に直接のコミュニケーションが成立しうる。
- 6) 文学作品の物語としてのコミュニケーション回路は、非対称的でありうる。
- 7) 文学作品の物語としてのコミュニケーション回路は、構造的な安定性を有しない。

【注】

- (1) 「無人称の語り手」の概念は、亀井秀雄（1983：16）による。作中人物の一人ではなく、また「作中どこにでも（主人公の内面にまで）自由に出入りできる作者自身とは必ずしも一致せず、つまり一応は区別された、その場面における自分の位置をそれなりに自覚している」語り手とされている。
- (2) 描出表現とは、印欧語の「体験話法」「自由間接話法」「描出話法」に対応する日本語の表現類型で、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型（野村2000：251）として定義できる。

【文 献】

- Fludernik, M. 2006/2009 *An Introduction to Narratology* (tr. from German). Routledge.
- Frantz, D. G. 1966 Person Indexing in Blackfoot. *International Journal of America Linguistics*. 32(1): 50-58.
- Frantz, D. G. 1971 *Toward a Generative Grammar of Blackfoot*. University of Oklahoma.
- Frantz, D. G. 2009 *Blackfoot Grammar (second edition)*. University of Toronto Press.
- 藤井貞和 2001 『平安物語叙述論』 東京大学出版会
- 藤井貞和 2003 「ゼロ人称と助動詞生成－物語／和歌の文法的動態」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』 10-1: 1-21.
- 藤井貞和 2004 『物語理論講義』 東京大学出版会
- Jespersen, O. 1924 *The Philosophy of Grammar*. University of Chicago Press.
- Jespersen, O. 1933 *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin LTD.
- 亀井秀雄 1983 『感性の変革』 講談社
- 亀井孝他編 1996 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂
- 金田一京助 1960 「アイヌ語学講義」『金田一京助選集 I アイヌ語研究』 三省堂: 1-244.
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』 ひつじ書房
- 草野清民 1901 『草野氏日本文法』 富山房
- Leech, G. N. and M. H. Short 1981 *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. Longman.
- 松本克己 2010 『世界言語の人称代名詞とその系譜－人類言語5万年の足跡－』 三省堂
- Matthews, P. H. 2007 *Oxford Concise Dictionary of Linguistics (Second edition)*. Oxford U. P.
- 中川 裕 1995 『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館
- 中川 裕 2011 「アイヌの神謡における叙述者の人称」『北方言語研究』 1: 139-156.
- 野口武彦 1994 『三人称の発見まで』 筑摩書房
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテクスト－関係・効果・様相－』 ひつじ書房
- 野村眞木夫 2004 「「夕焼け」のポイエシス－テクストとしての現代詩－」『表現研究』 80: 19-26.
- 野村眞木夫 2005 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性」『上越教育大学国語研究』 19: 1-19.
- 野村眞木夫 2006 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性(2)－コミュニケーションとダイクシスの観点から－」『上越教育大学国語研究』 20: 1-19.
- 野村眞木夫 2007 「テクストのタイプと人称のタイプ－願望表現と二人称小説を視座として－」『上越教育大学研究紀要』 26: 15-29.
- 野村眞木夫 2008 「コミュニケーションの組織とテクストにおける人称－人称の様相についての問題提起－」『上越教育大学研究紀要』 27: 145-156.
- 野村眞木夫 2009 「テクストから見た日本語の人称－日本語の小説における人称表現とその階層性－」『上越教育大学研究紀要』 28: 145-156.
- Rask, R. 1811 *Vejledning til det islandske eller gamle nordiske Sprog*. Schubothes Forlag.
- Rask, R. 1811/1843 *Grammar of the Icelandic or Old Norse Tongue* (tr. from the Swedish). Wiliam Pickering.
- Siewierska, A. 2004 *Person*. Cambridge University Press.
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』 岩波書店
- 田窪行則 1997 「日本語の人称表現」田窪編『視点と言語行動』 くろしお出版: 13-44.
- 田村すゝ子 1972 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』 61: 17-39.
- 田村すゝ子 1996 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
- Uhlenbeck, C. C. 1938 *A Concise Blackfoot Grammar*. Noord-Hollandsche Uitgevers-Maatschappij. (Rep. 1978 AMS Press.)

【音 源】

Music of Central Asia vol.1 Tengir-Too: Mountain Music of Kyrgyzstan. (SFW CD 40520): Smithsonian Folkways Recordings.

Category of Person in Literary Text and Communicative Circuit

Makio NOMURA*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to search for a system of person in Japanese literary texts, conceptualizing their communicative circuit. Fourth person and fifth person are proposed in some previous papers about the studies of Algonkian language and Ainu language. If the concept of person is defined as a system of reference, there is no necessity of the hypothesis about fourth person and fifth person. First, second and third persons may appear equally in the sentence of narrative. Their combinations are transformed freely in the text. Narrator and the author may be assimilated to those referent and the relationship that the narrator or author interact with the character will be created. It is possible that a second person character in the text may be recognized as a real reader. Under the above recognition, the communicative circuit of literary texts is not a symmetric model of nested structure but is asymmetric and structurally unstable.

* Humanities and Social Studies Education